
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 67

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1321. 映像と情感を喚起する文章・ウィルバーの最新刊・人口知能に関する協働プロジェクトへ向けて
- 1322. 探究魂との一体化
- 1323. 意識の向こう側と精神の火
- 1324. プラグマティストとしての自覚と準備への邁進
- 1325. 迫り来る冬への思い
- 1326. 現在と未来の誰かに向けた手紙の中で
- 1327. 手紙への転生に向けて
- 1328. プラグマティズムと文化的な価値と技術の伝承について
- 1329. 遙か彼方の世界と糸の導き
- 1330. 父からの手紙と遙か彼方の場所に向かって
- 1331. 出版記念ゼミナールの第一回のクラスより
- 1332. 複雑性科学を活用した発達研究について
- 1333. ああそれが
- 1334. きっとそうだ
- 1335. 久しぶりの一時帰国:名古屋での熱情と爽やかな風
- 1336. もう一つの夢
- 1337. メタ理論や日本的発達理論に関する雑感
- 1338. 自己の主題を求めて
- 1339. 人工知能の探究と論文創作について
- 1340. 意味への渴望と意味への意志

1321. 映像と情感を喚起する文章・ウィルバーの最新刊・人口知能に関する協働プロジェクトへ 向けて

夕方に、嵐のような突発的な雨に見舞われた。私は幸い書斎の中にいたが、雷を伴うあまりに激しい雨に少々驚かされた。地面に叩きつけるような雨が降り、同時に突風を伴っていた。窓ガラスに激しくぶつかり、しぶきを上げる嵐のような雨を見ていると、その激しさがある瞬間から美しく思えた。

遠くの空が晴れていることも手伝ってか、目の前の雨の世界がとても幻想的なものに思え、この激しい雨には自然の力強さを表現しているかのような美しさがあった。それは自然の躍動感が生み出す美だと言っていいかもしれない。激しい雨が道路にたまり、すぐさま水の層がうっすらと道路の上に現れた。その上を激しい風が通り抜ける時、その姿は波打つ海のように思えた。

今日の午前中も論文を読むことに全ての時間を充てた。「マルチフラクタルトレンド除去変動解析」に関する専門的な論文や、ダイナミックシステムアプローチをキャリア発達の研究に適用した論文、センスメイキングに関するカール・ワイクが執筆した論文など多岐にわたる。そうした論文を読む中で、ふと全く関係のないことを考えていた。「日々、文章として書き残すことがらは映像と情感を伴っていないといけない」という考えが突如自分の内側から顔を覗かせた。

日記を執筆する際、日々の出来事を事実として記述するのではなく、視覚的かつ感情的なものを引き起こす媒介としての言葉を生み出していくことが重要だ。内側に一切作用しない事実をどれほど書き残しても、それは全く意味がない。重要なのは、日々の出来事が生きた映像かつ感覚として喚起されるような文章を書いていくことだ。なぜなら、こうした生きた映像や感覚を通して私は日々生きているからである。

一日が一つの物語であり、大きな物語の大切な一部であるならば、こうした生きた映像や感覚こそが、物語を構成する重要な要素となる。私はそれをないがしろにすることはできない。自分自身が日記を読み返した際に、何か内側を喚起するようなものが立ち込めていなければならない。

嵐のような雨が通り過ぎ、再び静寂さを取り戻した世界の中で、そのようなことを思う。嵐のような雨が降る数時間前に、注文していた書籍が何冊か届いた。そのうちの一冊であるウィルバーの新刊

書“The Religion of Tomorrow: A Vision for the Future of the Great Traditions—More Inclusive, More Comprehensive, More Complete (2017)”は、それがハードカバーであるせいもあってか、SESを凌ぐような分厚さに思えた。SESほどではないが、100ページを越す注記が今回の作品にも付されている。中身をざっと眺めると、やはり第三層の意識段階に関する記述と「統合的記号論 (integral semiotics)」の箇所は読む価値がありそうである。

だが、一つ気がかりだったのが、今回の作品は参考文献があまりにも少ないことだ。人間発達に関する科学的な論文はおろか、重要な専門書が全く活用されていないことに少々驚く。ウィルバーは科学者ではないため、過去のどの作品においても、科学論文が引用されることはほとんどなかったが、それにしても今回の具材となっている文献リストの中身は、貧弱だと言わざるをえないだろう。本書を一つの巨大な思想的小説とみなし、そのような態度で本書を読み進めることが賢明かもしれない。とりあえず来週から本書を一読したいと思う。

現在は、人工知能 (AI) に関する協働プロジェクトなどまだないが、知性発達科学の探究を進めれば進めるほど、この領域の研究と実務において、AIの存在を無視することはできなくなりつつある。以前の日記で書き留めていたように、AIを活用した発達測定は十分に実現可能であると最近思うようになっており、これに関係する協働プロジェクトに向けて、AIに関する専門知識を獲得しておく必要があると感じ始めた。

そうしたこともあり、今日は夕方に、MIT出版、ケンブリッジ大学出版、オックスフォード大学出版など、科学的な専門書を取り扱っている出版社の中でもとりわけ好んでいるそれら三つの出版社が発行しているAIの関連書を吟味し、それぞれの出版社から一冊ずつ専門書を購入した。

コンピューターサイエンスの専門家になるつもりは毛頭ないが、AIに関する協働プロジェクトに従事する日が近い将来やってきそうな予感を持っているため、AIの専門家と対話と協働ができるほどの知識体系を構築することは最低限の準備だと思う。それら三つの書籍もこの夏期休暇の間に読み通しておきたい。時代のうねりを感じ、時代のうねりの中に生きていることを強く実感する。2017/7/19 (水)

1322. 探究魂との一体化

夢を見ない静かな日が続く。自分の無意識が眠っているかのような日がここ数日続いている。もちろんこの数日間、全く夢を見ていないわけではなかった。事実、昨夜は少しばかり夢を見ていた自覚があり、夢の内容が断片的な記憶として残っている。だが、それらは大きなまとまりを持たない。つまり、それらは意味を汲み取るのが難しいほどに小さな単位として独立的に生み出され、また独立的に記憶に留まり続けている。

起床直後の世界は、夢を見ない穏やかな無意識を象徴するかのように静かだ。少しばかり鬱蒼とした薄暗さを醸し出す外側の世界を眺めながら、私は今日という一日をスタートさせた。早朝六時前に今日の仕事を開始し、まずは日記を書き留める。一切の風が吹かない静止した世界の中で、小鳥の声だけがこだましている。

視覚的世界は一切動かず、聴覚的世界だけが躍動しているような感覚。視覚的な静と聴覚的な動のコントラスト。これが逆だったら、それはそれで一興だ。

夏季休暇も一ヶ月が過ぎ、ちょうど折り返し地点に到達した。思えばこの一ヶ月間は、随分と多くの専門書と論文を読んできたように思う。まさに私が計画し、望んでいたようにこの休暇を過ごすことができている。仕事の合間合間に休暇があるのではなく、仕事が休暇となり、休暇が仕事となる生活。すなわち、仕事と休暇が分離したものではなく、完全に一つの統一体としてそれが一日を成す生活を送ることができている。そうした生活に私はこれ以上ない至福さを感じている。

こうした至福さをもたらすきっかけになったのは、やはり欧州で生活を始めたことと大きな関係があると言わざるをえない。欧州での生活を始めて以降、探究時間が純粋に伸びた。一日における探究時間の限界値が、日本にいた時のものよりも確実に伸びている。その要因の一つは、欧州の地で自らの探究の意味の粒子を掴んだことが挙げられるだろう。

また、探究を進めるための肉体と精神を鍛練し直したことも大きな要因として挙げられる。意味と肉体と精神が大きな連関の鎖で繋がれる時、それら三つを繋ぐ鎖さえも消滅する形で、自己が「探究魂」と一体となった感覚がある。自己とはそもそも探究を宿命付けられていて、探究を通じてこの世界に関与する存在なのではないかと最近よく思う。探究魂との合一により、起床から就寝に向かう

全ての瞬間が探究となり、仕事となり、休息となる。そしてそれは、眠りの意識の中でも続いているにちがいない。意識と無意識の中に探究があるのではない。探究の中に意識と無意識があり、全てがある。そのような形で生きる時、それは幸福な生活であると私は形容する。

六時を過ぎてもいつものように辺りが明るくならない。この鬱蒼とした薄暗さはどうやら薄い雨雲のせいようだ。突然、雷が鳴り始め、雨がポツポツと降り始めた。私がこの雨を眺めているのではなく、探究魂の中にこの雨がある。そのようなことを思いながら、午前中の仕事に取り掛かることとする。

2017/7/20(木)

1323. 意識の向こう側と精神の火

早朝の仕事に取りかかろうとすると、けたたましい雷とともに、雨が降り始めた。辺りの鬱蒼とした薄暗さは消えていくというよりもむしろ、その存在感を強めている。白い閃光を伴う雷が、この地上のどこかに落ちたことを知る。それはどこか、自分の頭上に落ちてきたかのような感覚を引き起こした。

稲妻が白く輝く時、私は意識の向こう側を覗くような感覚があった。意識の向こう側、それは常に私たちのすぐそばにある世界なのだが、普段私たちはそれに気づくことができない。なぜなら、それは私たちにとってあまりにも近くに存在しているからだ。意識の向こう側、それは「あちら」だと思っていたものが実は「こちら」だったと気づく世界。そんな世界をずっと覗き込むことを促したのが、白い閃光を伴う先ほどの雷だった。雨脚がどんどん強くなる。

今日はちょうど四日分の食料が尽きる日であるため、昼食前に買い物に出かけなければならない。しかし、こうした雨が降り続くのであれば、冷蔵庫にかろうじて残っている食料だけでなんとかするのも悪くはないと思った。とりあえず、雨の状況を見て、また後ほど買い物に行くのかどうかの判断をしたいと思う。

以前、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスに触れたことがあったように思う。ヘラクレイトスは、変化のさなかにあって変化しないものをロゴスと呼び、それを火に喩えた。それを思い返した瞬間、「ああ！」という感嘆の声が漏れた。自分の内側の精神に火をつけられたような感覚があったのである。

自らの精神が自らの精神と闘争をしながら天高くどこまでも昇っていく心象映像が見えた。先ほど地上に落ちた稲妻とは逆向きのベクトルを持ち、自らの精神はどこまでも高く上昇していくかのようにであった。下降だけではなく上昇、上昇だけではなく下降することがいかに大切なことかを再度知る。下降的なアガペーと上昇的なエロスの双方を通じて生きることを忘れてはならない。アガペーとエロスの均衡は、一種の無変化地点を生み出し、そこに自分の活動の根源の一つがあるように思え始めた。

雨は一向に止む気配がない。窓ガラスにぶつかる雨滴の音に耳を傾けながら、私はそろそろ早朝の仕事に取り掛かる必要があることを知る。今日は午前中に、エスター・セレンとリンダ・スミスが編集したダイナミックシステム理論に関する専門書を読み、ザカリー・スタインが執筆した教育哲学に関する論文を何本か読む。午後からも引き続き、いくつかの論文を読むことによって今日の仕事を終えたいと思う。2017/7/20(木)

1324. プラグマティストとしての自覚と準備への邁進

早朝の雷を伴う雨が過ぎ去り、とても穏やかな世界が目の前に広がっている。薄い雲が空を覆っているため、相変わらず太陽の姿を拝むことはできないが、雷雨が止んだことにより、私の気分も変わった。この天気であれば買い物に出かけることができそうだ。昼食前に、数日分の食料を購入するため、近くのスーパーに行きたいと思う。

午前中、“A Dynamic Systems Approach to Development: Applications (1993)”に収められている、ダイナミックシステムアプローチを発達研究に適用した第一人者であるポール・ヴァン・ギアートの論文を読んだ。専門書に掲載される論文にしては珍しく、70ページ近くに及ぶ長い論文であったが、随所に学びになることがあった。

フローニンゲン大学で長らく研究を続けていたヴァン・ギアートの仕事から私は多大な影響を受けてきたが、彼の仕事の底はまだ見えない。それぐらいに、ヴァン・ギアートの発達思想とモデリング技術には習うべきことが無数に残っている。ヴァン・ギアートの仕事に触れるたび、自分が歩んでいかなければならない道のりが遠いものであることに気づかされる。だが焦ることなく、着実に自分の道を歩き、自分の道を切り開いていこうと思う。一人の探究者にできることはそれしかないのだから。

ヴァン・ギアートの論文を読んだ後、私が敬意を表している同年代の哲学者ザカリー・スタインの論文を二本ほど読んだ。スタインの論文を読むにつけ、私自身がプラグマティズムの思想に影響を受けていることを知る。スタインは、米国の思想家ケン・ウィルバーが、ウィリアム・ジェイムズ、チャールズ・パース、ジョン・デューイなどのプラグマティズムの思想を継承していることを指摘しており、論文の中の記述を読むと、私も随分とプラグマティズムの思想を持っていることに気づかされた。

とりわけ、概念と実践が共存在し、相互に影響を与え合う形で私たちはこの世界に関与している、という発想を持っていることなどに端的に表れている。これまで一度も自分がプラグマティズムの思想に多大な影響を受けていることに気づけなかったが、いくつかの側面において、私はプラグマティストなのだろう。

現在の夏季休暇、九月からのオランダでの二年目の生活、そしてこれからの八年間は、自分にとっては準備の期間である。準備を終え、本格的な仕事に着手することができるように、それまでの期間は、自分の内側に巨大な体系を構築し、その体系の核に当たる探究の意味と意義を驚掴みにしなければならない。

カール・マルクスが大英博物館の図書室に通い詰めたような日々を私も送りたい。とにかく焦らないことが肝要だ。他者や社会の声に惑わされることなく、一切の事柄を八年後に向けた準備に当てることを強く望む。それ以外に望むものはない。

敬愛する小説家の辻邦生先生が処女作を出したのは、30代の後半であった。辻先生が自ら述べるように、小説家としての仕事を最初に世に送り出したのは、世間一般的な基準からすれば遅かったのだ。だが、そこから生涯を閉じるまで、誰よりも数多くの作品を残していった。最後の最後まで小説家として生き、執筆に次ぐ執筆を自らに課していたその姿には打たれるものがある。

辻先生の最初の仕事が形になることが遅かったという事実、そしてそこから他の追随を許さないほどに自らの作品を生み出し続けたという事実、今の私はとても励まされている。自らの論文を書き書く日の到来に向けて、この八年間はとにかく人知れず準備に邁進したい。2017/7/20(木)

1325. 迫り来る冬への思い

夕食中、食卓の窓から外を眺めると、夕暮れ時の涼しい風が辺りを吹き抜けているのが見えた。今日の早朝は雷雨に見舞われ、午後から天気が回復しながらも、夕方に入るあたりで突発的な雨に見舞われた。そして、今この瞬間は空が晴れ渡っている。どうやら明日は、一日中天気に恵まれるようだ。

夕暮れ時の穏やかな太陽が世界を優しく包んでいる。私は思わず、その世界に身を委ねた。平穏な気持ちがしばらく続いた後、突如として、あの厳しい冬がまたやってくることに對して少々怖気づく気持ちになった。「あの過酷な冬を自分は乗り越えることができるのだろうか・・・」という言葉が自然と漏れた。

昨年、私は初めて北欧に近いこの地の冬を経験した。それは外側の世界の厳しさのみならず、内側の世界の厳しさを私に突きつけてきた。私は、あの過酷な冬をなんとか耐え凌ぎ、耐える中で一步一步の前進を遂げてきた。そして今がある。

少し前に、私はあの鬱蒼とした厳しい冬の到来を懐かしく思い、冬がやって来ることを期待しているようなことを日記に書き留めていたように思う。ひるがえって今は、それとは真反対の感情を持っている。諸々の境界線の上を歩くことを余儀なくさせる、あの冬がやはり怖いのだ。真の冬を真に生き抜いた先に、また新たな自己の姿があるだろう。とにかく今は、一度限りのこの夏を精神の髓を通して味わい、この季節を通して養われた髓液が冬の時代に滲み出るように、日々の瞬間瞬間を過ごしたいと思う。

今日は午後より、明後日から始まる出版記念ゼミナールの初回のクラスに向けて最終準備をしていた。Adobe Connectと並行してPreziを活用するのは今回のゼミナールが初めてであるため、動作確認を入念に行っていた。『成人発達理論による能力の成長』を扱うゼミナールは今回が最初で最後ということもあり、思い入れのあるゼミナールになりそうだ。有り難いことに、今回はこれまでのゼミナール以上に多種多様な経験を持つ受講生が参加して下さる。

受講生の方々とのやりとりは貴重な財産となるだろう。毎回のクラスを通じて、私自身も様々な気づきや発見を得るであろうから、各回のクラス終了後に自分自身でも振り返りを欠かさず行いたいと思

う。ゼミナールは明後日から九月の初旬にかけて行われる。そこからはフローニンゲン大学での二年目のプログラムが始まり、すぐに冬を迎えることになる。

このゼミナールがあったことにより、迫り来る今年の冬の捉え方が必ずや変化するのではないかと期待している。冬を通じて何を学び、どのような成熟過程を経るのかに思いを馳せながら、明後日からのゼミナールに臨みたい。2017/7/20(木)

1326. 現在と未来の誰かに向けた手紙の中で

今朝は六時前に起床し、六時過ぎから早朝の仕事に取り掛かり始めた。うっすらとした青空の中にちぎれ雲がぼつぼつと浮かんでいる。早朝の穏やかな太陽光が赤レンガの家々の窓に照らされ、優しく反射している。一羽ののカモメが家々の屋根の上を優雅に旋回している。清澄な朝に今日一日の活動の誓いを立てる。

昨夜は少しばかり印象的な夢を見た。夢の中で私は、旧友たちとサッカーに興じていた。最初私はサイズの合わないスパイクを履いており、自分の動きに大きな違和感を感じていた。しかし時間の経過に応じて、私の足がスパイクに順応し、途中からは自分の足に完全にフィットしているような感覚があった。

身の丈に合わぬ状況に置かれ、徐々に丈が合ってくることを暗示するような夢。現在の自己を超えた環境に投げ込まれることによって、徐々に環境に適応し、環境によって自己が育まれることを暗示するような夢。また、環境から自己への働きかけのみならず、自己が環境に適応しようとする能動的な働きを示すような夢だった。この夢の場面が終わる時、私は別の夢へと誘われ、その後は断片的な夢の流れに組み込まれていった。

時間の流れと手をつないでいるかのような夢の流れ。それは連続的な流れでありながらも非連続的な流れでもある。時間の流れない夢の世界や時間が過去未来と前後するような夢の世界。ある場面の中での時間は連続的に緩やかに流れるが、場面の変化は非連続的な時間の流れを暗示する。夢と時間の関係はとても不思議だ。

昨夜の就寝前に、自分の今後の生き方と取り組みについて考えを巡らせていた。突発的に浮かび上がってきたのは、「学術論文は人類への手紙である」というウンベルト・エーコの言葉だった。その言葉を思い出す時、私は真摯に人類への手紙を書きたいと思った。しかもそれは、誰も想像のできないほどのおびただしいほどの量で。

現在を生きる人類と未来を生きる人類に手紙を書き続けたいのだ。それが自分の最も望むことであることにはたと気づかされる。現在と未来を生きる人類に向けて、誰も信じられないほどの量の手紙を書こうとする自らの意志の根源は何なのか。私はなぜ全てを飲み込んでしまうほどの量の手紙を書こうとするのだろうか。それについて考えていた。

「なぜ」という質問はいつも私の期待を裏切る。大抵、それに対する明確な理由など生まれて来ない。生まれ出てくるのは取り繕った理由ばかりである。私にはもつと根源的な理由があることを知っている。自己の根源を通じて絶えず手紙を書くのである。

私がこれからの数年間をとりわけ準備の期間としているのは、爆発的な量の手紙を書くために他ならない。今の自分の知識と経験ではそれを成しえないことを痛感している。

ベッドで仰向けになりながら、私は計算をしていた。「一万時間の法則」を、通説で言われている10年間の歳月をかけて通過するのではなく、三年以内に通過しようという強い思いが湧き上がっていた。少なく見積もって毎日自らの探究に10時間の時間を充てるならば、二年と九ヶ月弱で一万時間に到達する。そうであれば、これからの10年間において、「一万時間の法則」を少なくとも三回ほど通過していくことができるということに大きな感激を覚えた。

その感激は自然と目頭を熱くさせた。これからの10年間の中で「一万時間の法則」を最低でも三回ほどぐり抜け、八年後を迎える頃には、月に二通のペースで手紙を書きたい。理想で言えば、科学的な手紙と哲学的な手紙をそれぞれ一通ずつ書くことができれば理想だ。それが探究者としての自分の精神に調和をもたらし、止むことのない爆発を継続させることができる。

毎週一通の手紙を書くことができればそれは最善だが、そこまで欲張る必要は今のところないだろう。書き続ける手紙がこの世界の誰か一人に届けばそれでいいという思い。しかも手紙の受取人は、

現在の誰かである必要もなく、50年後や100年後の誰かであっていいのだ。そうした考えが、自分の内側の消えることのない炎の上に、さらに大きな炎を乗せていく。

現在の誰か一人、未来の誰か一人に必ず届く手紙を書き続けていくこと。手紙を書き続ける人生であって、書きかけの手紙の中で幕を閉じる人生。このような人生があってもいいのだということを自ら示しながら生きること。このような人間がこの世界にいたのだということを自ら示しながら生きること。私にできるのはそれしかない。2017/7/21(金)

1327. 手紙への転生に向けて

バッハ、モーツァルト、ベートーヴェン、シェイクスピア、プルースト……。創作に次ぐ創作を継続させた偉人の名前とその存在の輪郭が、昨夜の就寝前の自分の目の前に現れた。もはや私は、創作に次ぐ創作を成し遂げた彼らのような人物しか見ることができない。表現に表現を重ね、人生の最後まで内側のものを外側に形として吐き出し続け、吐き出された形が価値を持つために尽力をし続けること。規律と克己を持って、自己と表現物の双方を絶えず磨き続けることの中で日々を過ごしていくこと。これが何よりも重要だ。

今の私が何も形として残せていないことや価値あるものを創作するための知識や経験が圧倒的に欠落していることに対して焦る必要はない。ただし常に念頭に置いておかなければならないのは、今述べた形で日々を生きていくことだ。それだけは絶対に忘れてはならない。

ウンベルト・エーコが残した言葉「論文は人類へ向けた手紙である」という言葉が持つ感覚質がまだ自分の内側に留まり続けている。現状、私は手紙の書き方やそれを絶えず創作していくための自分なりの方法論を確立していない。今はその前段階に自分がいることを知る。今の私は、手紙を書こうとする自分を奮い立たせているような段階にいるのだ。

自らを奮い立たせる必要がなくなるまで自分に火を注ぐことによって、初めて方法論の確立に向けた歩みへ踏み出していけるような気がする。そこでようやく、手紙を書こうとする自分は消え、私は手紙そのものになることができるだろう。その一点だけを見つめ、その点に向かうことを遠ざけるものは一切見ない。その一点から聞こえてくる声だけを聞くために、その声を妨げる音に一切耳を傾けな

い。そうした態度と透徹した意志がなければ、私は自らに与えられた自分固有の生を生き切ることはできないだろう。自己が滅却し、手紙として転生すること。そこだけに向かう。

ふと顔を上げると、早朝の太陽によって輝いている世界が目飛び込んできた。今日は昼食前にランニングに出かけようと思う。午前中は、ザカリー・スタインの論文を数本読み、昨日届いたケン・ウィルバーの最新刊に目を通したいと思う。昨日、人工知能に関する専門書を三冊ほど購入した。振り返ってみると、これは必然の成り行きだったように思う。知性発達科学と人工知能の接点を考えてみた時、両者の間には強い親和性があり、特に知性発達科学の知見をこの社会に還元していく時に、人工知能の力が大いに必要になると予感している。

これまで人工知能に関する探究などほとんどしていなかったのだが、自分の仕事の性質を考えると、これから人工知能を真剣に探究しようという気力が満ち溢れてくる。人工知能を作ることに興味があるのではなく、人工知能の仕組みとその活用方法を探究することに興味がある。人工知能は、自分が興味を持っている教育学、哲学、発達科学、複雑性科学などと密接に関わっていることから、この夏から少しずつその探究を進めていこうと思う。2017/7/21(金)

1328. プラグマティズムと文化的な価値と技術の伝承について

昼食前のランニングに向けて、午前中の時間は全て、ザカリー・スタインの論文を読むことに充てていた。昨日、自らがプラグマティストの側面を持っていることに気づかされたのも、ザックの論文による影響が大きい。ザックと私は同年代に属しており、彼のほうが五歳ほど年上だ。ザックが今の私の年齢の時、すでに彼は数多くの論文をこの世に送り出していた。そうしたことを考えると、今の私はやはり何も仕事をしていないのだということを知る。

昨日得られたプラグマティストの自覚について、少しばかり抜け漏れている点があったため、もう少し書き留めておく必要がある。私がプラグマティストの側面を持っていることに気づかされたのは、プラグマティズムの伝統を築き上げてきた先人たちの仕事に大きな共感を抱いていたことに端を発している。ウィリアム・ジェイムズを始め、チャールズ・パースにせよ、ジョン・デューイにせよ、彼らは心理学的な探究に従事していながらも、単に科学的な事実をこの世界に提示するだけでは良しとしなかった。その事実をいかにこの世界で活用していくのかの哲学的な考察を経て、実践的な指

示も与えていたのである。このあり方に私は大変共感する。この世界の現象を科学的に記述するだけでは不満足なのだ。

世界を記述することと世界の中で実践をすることが共存在し、記述と実践が常にお互いに影響を与えながら絶えず高まっていく試みに従事しなければならない。その先に、個人や社会の豊かさが実現されていくと信じている。その実現に向けて、私は科学的な探究と哲学的な探究に絶えず従事しながら、この世界に関与するという実践に励み続けたい。

グレン・グールドが演奏するバッハのピアノ曲が小刻みに流れていく。今朝から八時間半に及ぶバッハのピアノ曲全集を聴き始めた。ちょうど昨日、ベートーヴェン全集を聴き終えた時、無性にバッハの音楽に触れたいくなった。この軽快なリズムは何と形容したらいいのだろうか。書斎の窓から見える木々が風に揺られるよりも圧倒的に小刻みであり、軽快だ。この小刻みかつ軽快な音の流れに身を委ねていると、知らず知らず自分が遙か彼方の世界に導かれていくことに気づく。

突発的に、来年の夏ではなく、来年の春にエジプトとギリシャを訪問する思いを新たにしたい。その思いをもってして、来年の四月に両国を訪れる予定を仮押さえした。古代エジプトと古代ギリシャの文明に思いを馳せる時、両者の文明がこの現代社会に形として残っていることに改めて感銘を受けた。希薄化してしまったもの、形骸化してしまったものもあるだろう。

だが、それでも両者の文明は脈々とこの現代社会に息づいていることに畏怖の念を持つ。ふと私は、教育の目的は多々あるが、デューイが掲げた教育の目的の一つとして、文化的な価値と技術の伝承を挙げている点に強い共感の念を持った。

私たちは自国の文化に根ざす価値や技術が何であるかを見極め、それらを伝承するような意思と実践方法を持っているだろうか。そして、私たちの自国の教育は、それらを実現するにふさわしいものだと胸を張って言えるだろうか。これらの問いについては、私たち一人一人が立ち止まって考えなければならないだろう。2017/7/21(金)

黄昏時を迎えた土曜日の夕方。七月も残すところ、あと10日ほどとなった。七月は、年間のフローニンゲン気温の中で最も気温の高い月のはずなのだが、相変わらず20度前後の日々が続いている。書斎の窓から見える黄昏も、どこことなく秋のそれを思わせる。一体夏とはどのような季節のことを指すのだろうか。そのことをもう一度自分の体験を通じて掴み直す必要があるように思う。

夕食後、ふとしたきっかけで、レナード・バーンスタイン指揮、グレン・グールド演奏のバッハのピアノ協奏曲を聴いた。作業の手を止め、じっとその演奏に聴き入った。全ての意識を奏でられる音だけに集中していると、意識を喪失しそうになった。それはまるで、グールドが演奏中に感じていたであろう恍惚的な形で意識が遙か彼方の世界に収束していきそうな感覚だった。

大きな自我が小さな自我に収束し、小さな自我が粒子的な自我に収束し、その粒子がずっと遙か彼方の世界に溶け込んでいくような感覚。演奏が終わり、無音の世界に戻った時に初めて、この世界に再び戻ってきたのだという意識があった。しばらくグールドの演奏から離れていたが、つくづくこのピアニストの演奏、いや彼の存在そのものが不思議なものに思えてくる。結局、先ほど作業の手を止めて聴き入る以外にも、今日は一日中グールドが演奏するバッハの曲を聴いていた。明日からもしばらくグールドの演奏を聴くことになるだろう。彼の演奏が自分の中に溶けるまで。

午前中、なぜだか私は、この夏の北欧旅行に際して、ノルウェーの国土に足を踏み入れた時に感じるであろうことが先取りされる形で体験された。そしてその体験から一つの気づきが生まれた。それは澄み渡る水の流れのような感覚からもたらされる気づきだった。生きることは、複雑に絡み合った糸を解きほぐし、再び新たな糸を紡ぎ出していくことなのだという。

望んでもなく、待ってもいないそのような言葉が意識の流れの中に浮かんでいた。糸を絶えず編み直していくことが人生なのではないだろうか、という気づき。自分がノルウェーを訪れることになったのは、複雑に絡み合った糸の導きである。きっとそうなのだろう。そして、そうした糸が解きほぐされた結果として、今私はノルウェーという場所にいる。

私の身体はオランダにあるにもかかわらず、意識はすでにノルウェーにあった。絡み合った糸が私を導き、それを解きほぐす過程で私はまた新たな場所に行く。そして私は再び新たな糸を紡ぎ出し

ていくのだ。糸を解放させ、再び糸を紡ぎ出していくという連続的な波が、肉体的にも精神的にも全く新しい場所に自分を導く。それが今回の北欧旅行の事の始まりだったのだ。2017/7/21(金)

1330. 父からの手紙と遙か彼方の場所に向かって

今日からいよいよ『成人発達理論による能力の成長』の出版記念ゼミナールが開始となる。全六回にわたる今回のゼミナールを私自身もとても楽しみにしていた。今回はこれまで以上に多様な受講生の方々に恵まれ、当日のクラスの中でのやり取りが非常に楽しみである。また、本書を取り上げるのは今回のゼミナールが最初で最後であるため、思い入れも強い。ゼミナールの開始はあと一時間半後だ。

書斎の窓から外の景色を眺めると、今日はどうやら雨らしい。現在は曇りであるが、その雲の色や形を見れば雨が降るであろうことを容易に想像させる。通りに植えられた木々が、いつもよりも強い風にざわざわと揺さぶられている。そのような景色を眺めながら、私は昨夜の夢を思い返していた。

昨夜の私は、極めて局所的な夢を見ていたように思う。言い換えると、今の自分の記憶に残っているのはたった一つの夢の場面だけである。それは時間としてはとても短かった。夢見の意識から覚醒意識に移行する直前、私は夢の中で父から一通の手紙を受け取っていた。その手紙の文章の一つ一つが、父の肉声を伴ってありありと知覚されるような夢だった。

父の手紙にあったのは、私に関する「全ての肯定」だった。そこに記載されていた内容は、私の現在の歩みに関する全面的な肯定だけがあった。探究項目に関する共感、探究に打ち込む姿勢、生き方に関する全ての肯定だけがそこに記載されていた。人はこのように、別の人間を心底肯定することができるのだということを、父の手紙から教えられた。

何より、私は父の手紙の内容に大きな励ましを受けていた。手紙の文字を一文一文目で追うごとに、父の肉声が喚起される。言葉には書き手の全てが宿るのだ。人格も知識も経験も、そして思いも。それら、私たちが固有に持つ全てのものが言葉に宿るのだということ。これも一つ、父の手紙から得られた大事な教えであった。

手紙を読み終え、私は大切にそれを折りたたんだ。折りたたまれた手紙とは対照的に、私の全ては外側に向かって開かれていた。それは大きな何かに向かって歩いていこうとする開放感だった。そこで私は静かに目を覚ました。時刻を確認すると、時計の針は六時半を示しており、いつもより随分と遅い起床時間であることに気づいた。

今日からゼミナールが開講されるということもあり、少しばかり昨夜は興奮状態にあったため、寝付くのが遅かったのかもしれない。いずれにせよ、今日からまた新しい一日が始まったのだという確信と、今日もまた一つ新たな歩みを進めていくという気概に満ちた確信を得た。一日一日が、いつものように、そしていつもと異なる新たな日であるように、日々が遥か彼方の場所に向かって積み重なっていく。2017/7/22(土)

1331. 出版記念ゼミナールの第一回のクラスより

今日は午前中に、『成人発達理論による能力の成長』の出版記念ゼミナールの第一回のクラスが行われた。久しぶりにオンラインゼミナールを開講することもあり、初回の今日は諸々のことに少々手間取ることが多かった。今回のゼミナールからマイクロソフトのPPTではなく、Preziを活用した講義に切り替えた。その理由については以前の日記に書き留めていたように、より私たちの脳や視覚に訴えかける形のプレゼンを行いたかったからである。

Preziを活用することで、これまでのゼミナールの講義とはまた異なった説明が可能になったように思う。一方で、Preziを活用するためにはPCのワーキングメモリに注意しなければならないと思った。Preziを活用すると、どうしてもワーキングメモリを多く消費することになるようであり、説明の一部で音声途切れてしまうことがあったようだ。改めて自分のPCのメモリなどを確認してみると、随分とPCが重くなっているようだったので、PCを軽くするようにした。

また、これまでではブラウザをGoogle Chromeを使っていたが、以前のようにSafariに戻すことにした。色々調べてみると、やはりMacを使う場合にはSafariの方が良さそうだという結論に至った。特に、メモリの消費に関して言えば、Safariの方が圧倒的に消費メモリを抑えることができることがわかった。明日もまた初回の日曜日クラスがあるので、明日以降からは再びSafariをメインブラウザにしたいと思う。

本日の土曜日クラスの内容を振り返ってみると、一つ印象に残っているのは、発達プロセスを表す線形的なメタファーが非線形的なメタファーに移行することによって生じた変化についてである。カート・フィッシャーの功績の一つは、まさに発達プロセスを階段のような線形的な形で捉えるのではなく、乱高下の伴った非線形的なプロセスとして捉えたことにあった。

発達科学の領域において、こうしたメタファーの変化はパラダイムシフトとも呼べるようなものであり、受講者の方から質問があったように、これは様々な領域に大きな影響をもたらした。特に、発達研究と発達支援に対する影響が大きいだろう。既存のメタファーから新しいメタファーが生み出されるというのは、上述の通り、一つのパラダイムシフトであり、パラダイムが変化することによって、そもそも発達現象というものを複雑かつ動的なシステムやネットワークと捉える認識が芽生え始めた。

それに伴い、発達現象を捉える研究手法も新たなものが必然的に導入されるようになったのである。とりわけ重要なのは、複雑性科学の重要分野であるダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスのアプローチが積極的に活用され始めたことにある。無数に存在する様々な研究手法については、これまでの日記で取り上げてきた通りである。それらの新たな研究手法によって、これまで解明することのできなかつたような発達のプロセスやメカニズムが明らかになり始めた。

それに伴い、実証研究をもとにしたアセスメントや能力開発手法などが生み出されるようになったのである。発達研究において複雑性科学の手法が導入され始めたのは、今から30年ほど前ぐらいであるからそれなりの歴史はあるが、ダイナミックシステム理論や非線形ダイナミクスの手法が多くの研究者の間で活用されるようになったのは比較的近年のことである。そのため、こうした最先端の研究成果を取り入れた人財開発や組織開発を行っている事例というのはまだ少ない。人や組織をダイナミックなシステムかつネットワークと見立てて発達支援を行うというのは、まだまだこれからの話だろう。2017/7/22(土)

1332. 複雑性科学を活用した発達研究について

昨日に引き続き、今日もグレン・グールドが演奏するバッハの楽曲を聴く。しばらくは、この異質なピアニストの演奏を聴く日々が続きそうである。書斎の窓越しに外を眺めると、一日のうち最も強い日差しを持つ太陽光が辺りに降り注いでいた。日本で生活をしていた頃や米国で生活していた頃

は、緯度の関係上、日中最も日差しが強いのは午後二時あたりだとみなしながら生活を続けていたが、緯度の高いオランダ北部のこの街では、最も日差しが強くなるのは午後の四時あたりだ。

ちょうど今がその時間帯である。窓のカーテンの大部分を閉め、書齋に差し込む強い日差しを遮断することにした。しかし、カーテンによっていくら太陽の光が遮断されようが、その光が自分の内側に絶えず差し込み続けているという感覚が失われることはない。自分の内側には消えることのない光が灯り続けていることを知る。

夕食までの仕事に取り掛かる前に、再度今日のオンラインゼミナールについて振り返っていた。受講者の方から非常に優れた質問があり、それは発達現象を説明する際に複雑性科学が果たす役割についてである。

能力の成長について考える際に、一つの能力を構成する要素を特定し、それらの相互作用を考えることは、研究においても能力開発の実務においても重要になる。だが、一つの能力全体を部分に分割するというアプローチは一見すると還元主義的な、あるいは旧態依然とした科学的アプローチに見えるかもしれない。これは確かにそうだと思う。

しかし、複雑性科学のアプローチを活用する際に重要なのは、全体を要素に分割して考えるということに留まるのではなく、そこから再び全体への統合を図る思考が伴うことである。第二弾の書籍では言及することができなかったが、一つの能力を構成するサブ能力が全体としての一つの能力と相互フィードバックを与え合っている現象のことを「循環的因果」と呼ぶ。

能力の複雑な現象や成長プロセスを考える際のポイントは、フィードバックループの一方を捉えるのではなく、双方を捉えることにある。また、複雑性科学にも人間の発達と同様の原理を適用することができる。それは「含んで超える」という根本原理だ。つまり、複雑性科学も既存の科学を含んで超えて生まれたものであるがゆえに、これまでの科学の持つ特性を引き継いでいるのだ。

その一つが、分析を強みとする「分けて考える」という発想だろう。実際に、複雑性科学の手法を活用しながら発達研究に従事している時に、この「分けて考える」という科学の本質的な思考方法は大切になる。特に、概念モデルや理論モデル、あるいは仮説モデルを構築する際にこの思考方法がカギを握る。モデルというのは、現象そのものや現象の全てを把握するためにあるのではない。

モデルは現象の本質を捉えるためにあるのだ。言い換えると、発達研究においては、発達現象のプロセスやメカニズムの本質的な要素を抽出し、それらの要素の関係性を考えることによって、プロセスやメカニズムの本質を捉えようとするものが「モデル」と呼ばれる。

こうしたモデルを構築するためには、発達現象を生み出している要素を特定しなければならない。そして、要素を特定する際に力を発揮するのが分析的な思考方法である。分析的な思考を活用することによってモデルを構築し、そのモデルを検証することによって、発達現象を構成する要素が生み出す全体としてのプロセスやメカニズムを解明していくようなアプローチを採用するのが、今私が従事している研究の進め方だと言える。

要約すると、複雑性科学を活用した発達研究においても、既存の科学の強みでもある分析的なアプローチを活用することになる。ただし、そこに囚われるのではなく、部分の単純総和が全体を構成するわけではないという発想を持ちながら、複雑かつ非線形的な発達現象に迫っていくという特徴を持っている。受講者の方の質問のおかげで私もまた一つの新たな気づきを得ることができた。

2017/7/22(土)

1333. ああそれが

柔らかなバッハの音楽が薄紫色の優しい空気の中を駆け足で駆け抜けていく。夕方の仕事を終え、少し一息つくためにソファに腰掛けた時、そのようなことを思った。夕方の仕事に取り掛かりながらも、どこか自分の内側に文章を書き足りない感じが漂っていた。外に出すべきものは外に出さなければならぬ。

それは身体と精神を正常に働かせる上で非常に大事な行為である。とりわけ、自分の内側の感覚が言葉として外に表出したがっている時には、なおさらその自発的な運動を促してあげなければならない。それを抑圧しては決してならないのだ。どこか文章を書き足りる感じを抱きながら、先ほどの私は夕方の仕事に取りかかっていた。そのような時は決まって、専門書や論文に書かれている文言が頭に入ってこない。それは当然だ。

なぜなら、自分の内側は何かを取り入れることを待っているのではなく、何かを外に表現することを待っているからだ。この当たり前の事実、最近私はようやく自覚的になりつつある。だが先ほどの

自分は、書き足りない感じが自分の内側を満たしていながらも、何を書き足りないのかが一切わからないような暗中模索の状態にあった。そのような状態では、専門書や論文の内容が一切頭に入っていないので全くらちがあかなかった。

自分の内側の感覚はどのような言葉として外側に生まれ出てようとしているのかを静かに待つことにした。一本の木にとまるセミをそっと捕まえようとするように、私は静かに待っていた。すると私は、過去の日本人の一体誰が、「そよ風」や「黄昏時」、「愛」や「喜び」という言葉を生み出したのか、という考えに心を驚掴みにされた。書斎の窓から見える外の世界を過ぎ去っていく「それ」が「風」という名が与えられ、「風」という言葉の頭に「そよ」が付き、「そよ風」なる言葉が生み出されたそのことに、たまらない感謝の念を持った。

それが「そよ風」という名前であること、そしてそよ風と呼ばれるものが「このように」自分の内側で感じられることが、一つの奇跡だと思えた。一体誰が、このような素晴らしい言葉を生み出したのだろうか。

「そよ風」という言葉は、その言葉の外形に収まらない、はち切れんばかりの感覚質を私の内面世界にもたらししてくれた。この感謝の念、そして自分の内側に充満する否定することのできない感覚質は、「黄昏時」「愛」「喜び」といった言葉にも当てはまることであった。

私が出一つの言葉や概念を心底大切にしたいと思うのは、こういうことなのだ。言葉や概念は決して冷たいものでも死物と化したものではない。むしろ全く逆なのだ。言葉や概念は、これほどまでに暖かく、生き生きとした生命力を持っているのだ。

一匹の小さな蜘蛛が書斎の地面を這っているのが見えた。「また来たね」と私は思わず言葉を漏らした。柔らかいキッチンペーパーを食卓から取り出し、その上にその蜘蛛をそっと乗せた。そして、その蜘蛛を外に逃がした。

一匹の小さな虫。その虫が持つ一つの命。たった一つの言葉や概念。その言葉や概念が持つ一つの生命力。一つの生き物を無配慮に殺生することが全く許せないのと同様に、一つの言葉や概念をないがしろにすることは、私には許し難いことである。一つの生き物の命や一つの言葉や概念が持つ生命力に気づかない現代人。

生きているということ以上に何か大切なことはあるのだろうか？生きているものを愛せない者に一体何が愛せるというのだろうか？

「燦然」と「輝く」「黄昏時」の「太陽」が、この「世界」を「優しく」「包んでいる」。それは一つの「奇跡」であり、それは「生きている」ことを「強く」「実感」させるものだった。

最後に私はもう一度、それらの言葉を生み出した日本人に多大な感謝の念を持った。2017/7/22
(土)

1334. きっとそうだ

夕食前に入浴をしようと思ったが、やはりまだ文章を書き足りないというあの感覚が残っている。全てのものが必然的な形として外側に表現され、自分の内側に落ち着きをもたらす必要がある。自分の内側には、未だ形にならぬものが形になろうとして蠢いている。それは、躍動する生命のようなものであり、それに言葉を与え、外側に表現されなければ真の生命を持ち得ないもののように映る。

だから私はそれに救いの手を差し伸べ、生命を持つ形で外側に顕現するように手助けをしたいと思う。今日は早朝の曇り空から雨を想像していたが、雨が降ることはなく、一日を通して暖かい気温であった。むしろ、少し暑いと感じさせるような気温であったと言える。しかし、明日からまた20度を下回るという予報が出ている。

今日は早朝からオンラインゼミナールがあり、その準備とゼミナール後の様々な対応に時間を充てていた。そのため、今日は普段に比べて、論文や専門書を読む時間を取ることができず、何かを考え、文章にまとめていくということはあまりできなかった。しかし、今日はゼミナールがあった分、多様な受講者の方たちとのやり取りが引き金となって、いつもとは異なる脳の部位や思考回路が刺激されていたようだった。そのおかげでもあり、いくつか文章として書き留めておきたいことが湧き上がってきたのは事実である。

今この瞬間にまだ書き足りないものが何なのかを少しばかり探索していた。これは意識を内側に凝らし、探索をしてみようとしなければ発見することのできないものである。少しばかり気持ちを落ち着かせ、浴槽に浮かぶ身体のように、意識の世界の中に心をつろがせた。すると、フローニンゲンに

差し込む夕暮れの太陽の光が、私が三年前に生活をしていた米国のアーバインの夕暮れの太陽光であるかのように錯覚された。

アーバインで生活をしていた当時、私は休日に、アーバイン大学の図書館に足を運ぶことが何よりの楽しみであった。休日の行動パターンは決まっており、起床直後から読書を始め、昼食前にランニングに出かけ、アーバイン大学近辺のコリアンレストランで韓国料理を食べる。そしてカフェに立ち寄り、コーヒーを片手にアーバイン大学の図書館に向かう。コーヒーを少しばかりすすりながら大学図書館に向かう道中の自分の気持ち。それは絵も言わぬほどの期待感と高揚感で満ち溢れたものだった。全く未知なる世界への旅に向けた出発前のあの気持ち。

とにかくあの時の私は、休日にアーバイン大学の図書館に足を踏み入れることが何ものにも代えがたい楽しみであったし、静寂な図書館で自分の読みたい書物を読むあの時間は、至福以外の何ものでもなかった。西海岸の夕方の光が差し込むあの部屋のあの机。あの時の光景は私の内側から消えることなく今も鮮明に焼き付いている。

図書館が閉館の合図を告げる時、いつも私は、門限が迫り、泣く泣く遊ぶことをやめ、帰路につくような少年の気持ちを感じていた。図書館を出て、沈まぬ夕暮れを眺めながら自宅に向かったあの夏。沈んだ闇夜の中、月を見上げながら自宅に向かったあの冬。あの時の日々もまた幸福だった。そして、今はもっと幸福なのだを知る。

幸福を通じて幸福の中を生きること。幸福を通じて幸福の中を生きる、という幸福。きっと自分の存在そのものが、その存在を通して生きているということが幸福なのだろう。きっとそうだ。(土)

1335. 久しぶりの一時帰国:名古屋での熱情と爽やかな風

この空気。とても懐かしい濃厚な日本の空気が、自分の肺に溢れるように流れ込み、それが全身の細胞を生き生きとさせる。久しぶりに日本に帰ってきた私は、日本の大地を踏んだ瞬間にそのようなことを思った。今回の滞在先は名古屋だ。名古屋のあるホテルで、一つの学会に参加する。

私のアドバイザーの知り合いに、京都大学に在籍しておられる非常に著名な分子生物学者の方がいる。私はその日本人教授について全く知らなかったのだが、アドバイザーの助言もあり、その教授が主宰する学会に参加することにした。

分子生物学という言葉を知ると、とても専門的な印象を与える。分子生物学は生物現象における非常にミクロな世界を扱う、という程度の知識しか私にはない。日本に一時帰国する前に、アドバイザーであるサスキア・クネン教授の論文を読み、ダイナミックシステムアプローチを活用した研究に関しては、発達科学よりも生物科学の方が圧倒的に先に進んでいるという考えを改めて持った。特に、モデリングの技法やコンピューター・シミュレーションに関して随分と先にいるのが生物学だ。その論文の中に“Dynamic Systems Biology Modeling and Simulation (2014)”という専門書が引用文献に挙がっていた。

とても興味深かったので、私はその書籍を購入し、それがちょうど先日自宅に届いていた。到着に合わせて早速中身を確認すると、モデリングの技法やコンピューター・シミュレーションの活用に関して非常に進んでいるということを見て取ることができ、これはとても参考になると思った。

私の研究対象は人間の知性だが、生物学のアプローチから学ぶことが多々ある。そうした思いを胸に、名古屋で開催される今回の学会に参加することにした。学会会場かつ宿泊先のホテルに到着すると、そこはとても落ち着いた雰囲気を見せていた。華美でもなく質素でもなく、それでいて和の精神が生きているようなホテルだった。

ホテルの自室に荷物を置き、私は早速学会会場に行くことにした。今回は学会といっても、その京都大学の教授に師事している研究者が集まる身内の学会だ。学会会場に到着しても、まだ私はその教授の正式な氏名を知らなかった。会場は、ホテルの中規模な会議室であり、50人ぐらいの収容人数だった。

その教授のアシスタントらしき女性が、すでにホワイトボードの前に立って何やら準備をしていた。私はそのホワイトボードの近くに座った。すると、参加者が一斉に集まってきて、学会がすぐに始まった。私はまだ、学会で取りあげられるテーマが何なのか知らなかった。学会参加者に配られていた資料を確認してみると、一冊の小冊子が入っていることに気づいた。

早速それを取り出し、中身をパラパラと眺めてみると、当然ながら分子生物学に関する内容だった。その冊子を少し眺めてから、改めて会場全体を見渡すと、内輪の学会には意外と参加者が多く、その教授が非常に権威的な人物であることがわかった。それでいて、その教授の雰囲気はとても穏やかだ。今回の学会に関する趣旨説明があったのかなかったのかわからないうちに、突然、その教授が口を開いた。

教授:「お配りしたテキストを今からみんなで一緒に読み合わせていきましょう」

その言葉に阿吽の呼吸でうなづくアシスタントの女性。

アシスタントの女性:「それでは今からお配りしたテキストを読んでいきましょう。注意点としては、今からこちらの方から文章を読んでいただく時に、きっかり12文字だけ音読してください」

このテキストを12文字ずつ読んでいくことに私は少し違和感を覚えた。小冊子とはいえ、それを読み終えるには相当の時間がかかるだろうと思った。アシスタントの女性の顔を見ると、意味ありげな笑顔を振りまいていた。

アシスタントの女性:「きっかり12文字でお願いします。行替えなどに着目すると、12文字で読んでいくコツが徐々につかめると思います」

行替えに着目してみたが、文章を12文字で切っていく切れ目を見つけることは至難の業だった。会場の参加者の顔を見ると、このテキストの読み方に慣れているのだろうか、不審に思うような表情や不満げな表情を浮かべている人が一切いないように思えた。

「郷に入っては郷に従う」という言葉にあるように、私も一応、この学会で共通認識になっていると思われる、その読み方に挑戦してみることにした。

ホワイトボードの前に立っているアシスタントの女性の横に座っている女性は、その教授と非常に近い仲の教授のようであり、その方もこの領域の権威のように思えた。アシスタントの女性は、横の女性教授を飛ばし、私の横に座っている男性にテキストを読む旨の言葉を投げかけた。

その男性の顔を一瞥すると、どうやら日本人ではなく、モンゴル人のようだった。アシスタントの女性の言葉が聞こえなかったのか、それとも日本語が理解できないのか、その男性は黙ってじっとテキストを見つめていた。

私：“Hi, can you read Japanese?”

モンゴル人男性：“No…”

私：“I see. No problem.”

そのモンゴル人男性は、日本語が読めないようだったので、私が代わりに読むということを会場の全員に伝えた。すると会場にどっと笑いが起きた。笑いが起きた意味が私にはわからなかったが、今の流れでは、そのモンゴル人の男性が日本語が読めないことに対する笑いのように受け取るしかなかった。実際に、そのモンゴル人の方も、日本語が読めないことを笑われたのだということを察しているようであり、うつむき加減だった。

私はとても嫌な気持ちなりながらも、12文字きっかり読んで、そのモンゴル人男性とは反対側に座っている隣の人につなげた。その隣の人が12文字を読み終えた時、やはり私は先ほどの会場の笑いがどうにも許せなかった。私はとっさに、主催者の教授に大きな声で質問を投げかけた。

私：「先生、12文字でテキストを読んでいく趣旨はなんなのでしょうか？」

教授：「それは後にわかりますよ。ですが、12文字ずつ読んでいくとあと三時間かかりますがね」

教授は含み笑いをしながらそのように述べた。そこで再び会場に笑いが起きた。趣旨が明確ではない中で三時間を過ごすということ、そしてこの会場の不気味な連帯感とその対極にある排他的雰囲気がとても気味の悪いものに思えた。そして何より、私の隣に座っているモンゴル人の男性に対して取った、この場の全員の態度がどうしても許せなかった。会場にいる全ての人物に対して、私は「均質化された哀れな日本人」という言葉を心の中で発していた。

侮蔑的な言葉を自分の内側で持つことによって、なんとか自分の内側の怒りを鎮めることができるかと思っただが、やはり先ほどの会場全体の態度、そしてその教授の態度をどうしても許せなかった私は席を立ちあがった。

私:「失礼します。帰ります。先生、どうもありがとうございました」

私はその教授の方を見ることなく、荷物をかばんにしまいながら半身で会釈をし、そのような言葉を投げかけた。権威的な人物の許しがたい言動や態度を見るにつけ、幼少時代の私はいつも、「二度と起き上がれないところまで叩き潰す」という言葉を呪文のように心の中で述べる習慣があった。それは成人になった今も変わらない。そしてその言葉を心の中で唱えるだけではなく、幼少時代から常にその言葉を何らかの態度で示すことが今もなお続いている。教授に捨て台詞を投げるのが、今回の私の態度表明だった。

私が帰ることを伝えると、会場は静かになっていた。そして会場全員が私の方を見つめていた。私は一応、モンゴル人の男性と一緒にこの会場を後にするかどうかを尋ねた。すると、そのモンゴル人は一応残っておくという旨の言葉を私に述べ、一言をお礼を添えた。

私は立ち上がったままスーツを整え、平静な顔を装いながら会場を後にすることにした。そして、会場のドアを壊れるぐらいに激しく閉めた。

ホテルのロビーに行き、宿泊をキャンセルしてもらい、今から帰る旨を伝えた。すると、中学時代の後輩が私の後を追ってきた。

後輩:「先輩、帰っちゃうんですか。学会はまだ始まったばかりですよ……。それに招待されたディナーはどうするんですか？」

私:「あれを見て許せるのか？」

私は後輩が心配して追いかけてきてくれたことに感謝しながらも、ホテルの受付の方にキャンセルの手続きを進めてもらうように述べた。だが、後輩の「ディナー」という言葉を聞いた時、日本食がたまらなく恋しく感じ始めていた私の心は少し揺らいだ。しかし私は、あのような人たちと同じ場所にい

ることはできないという強い思いがあったため、やはり帰るということを後輩に伝えた。後輩も洪々承諾をしてくれたようだった。

ホテルの外に出た時、爽やかな風が自分の全身を包んだ。その涼しい風は、私の内側の熱を冷ますかのような優しさを持っていた。そこで私は夢から目を覚ました。

あの京都大学の分子生物学者は夢の中の人間だったのだと思う。しかし、夢の中に出てきた“Dynamic Systems Biology Modeling and Simulation (2014)”のテキストは確かに現実世界の私の書斎のソファの上に置いてある。全くの架空の人物や事物と現実の人物や事物が錯綜としていた。だが、私は実際の現実世界においてあのような場面に遭遇していたら、全く同じ態度を示していたと思う。2017/7/23(日)

1336. もう一つの夢

激しい感情のうねりがまだ消えない。それは今朝方に見た夢の影響だろう。

今日は昨日に引き続き、これからまたオンラインゼミナールのクラスがある。それまでに少しばかり気持ちを落ち着けたいと思う。それにしても、日本に一時帰国したあの夢の印象はとても強いものであったと今でも思う。今日は五時に起床し、すぐさまその夢について文章を書き留めておいたが、やはりまだ完全に言葉になっていないものが内側にあることに気づく。

実は、あの夢の前にもう一つ別の夢を見ていた。夢の中の私は、外の世界と遮断された狭い部屋で生活をしており、その場所はまるで監獄の独房のようだった。いや、実際に夢の中の私は前科があるようだった。窃盗罪。そのような罪を持ちながら生きているのが夢の中の私だった。

その狭い部屋には窓などなく、外の世界の様子は一切わからない。唯一外側の世界と交流を持てるのは、その部屋の壁にある、郵便物の受け入れのための隙間と飲食物が入る隙間の二つだけだ。何もない部屋の中でじっとしていると、母方の祖母が私の部屋を訪問しに来てくれた。二、三ほど言葉を交わし、再び私は一人になった。

私の頭の中には、たった一つのことしかなかった。前科を背負ったまま、米国のあの大学の客員研究員になれるのかどうか、ということだった。この社会で背負った罪は一生消えないということの重みを感じていた。罪の重みを背負いながらも、私はどうしてもその大学で研究を続けたいという思いに駆られていた。

時間としても短く、展開もほとんど無いそのような夢を私は見ている。だが、この夢が私に示唆していることは多岐にわたっていることに気づいた。それらを一つ一つ書くことはしないが、今この瞬間、私はそれらの一つ一つを確認している。独房のような部屋、祖母の訪問、夢の中の窃盗罪、罪を背負いながら生きていくということ、米国のあの大学で客員研究員になるということ。

それらが意味することを自分の中で一つ一つ明らかにしていった。連続する二つの印象的な夢から覚めて、二時間ほどとなった。時刻は午前七時を示している。真夜中に激しい雨が降り、その時に一瞬目を開けたが、改めて道路を確認してみると、雨の痕跡がやはり見える。しかし、今は嘘のように爽快な青空が広がっている。そよ風が時折通り過ぎていく、そんな穏やかな日曜日の朝である。

今日はこれから論文を一本ほど読み、その流れでオンラインゼミナールを行いたい。今日のクラスが終了したら、昼食前にもう一つ論文を読み、午後から夜にかけてはいくつか専門書を読み進めたいと思う。自分の内側、とりわけ無意識の世界では何やら様々な動きがあるようなのだが、顕在意識下の生活は至って平穏である。これほどまでに充実している夏季休暇は過去になかったと言えるほどに、休暇中の日々は充実している。今日もそうした充実感をもたらす大切な一日になるだろう。

2017/7/23(日)

1337. メタ理論や日本的発達理論に関する雑感

午前中、発達心理学の開拓に多大な貢献を果たしたジェームズ・マーク・ボールドウィンと記号論を提唱したチャールズ・サンダース・パースの思想に関する論文を読んでいた。両者の思想から得るものはいつも多く、二人が書き残した全集は私にとって非常に貴重な文献である。

二人の巨人は、ともに多様な学術領域を横断し、晩年においてそれらの領域を統合するようなメタ理論を提唱することに尽力していた点が共通している。とりわけ、ボールドウィンの晩年は、キャリア

の前半期で残したような発達段階モデルを超えて、人文科学と生物学などを架橋するメタ理論を提唱し、包括的な発達理論を提唱している。

彼らの仕事を見ていて重要だと感じたのは、メタ理論の提唱が単なる複数の領域間の架橋に終わらない、ということである。つまり、彼らが提唱したメタ理論は、単純に複数の学術領域をつなぎ合わせるだけではなく、それぞれの領域固有の限界や盲点を指摘しながら、個別個別の領域のさらなる発展に寄与していくという特徴を有している。要するに、それらのメタ理論には、ある種、個別領域の進展を促す作用と規制的機能を持ち合わせているのである。中でも、この規制的機能というのがカギを握るように思えて仕方ない。

カート・フィッシャーの理論でも指摘されていることだが、複数の知識領域に習熟し始めると、それらを一つの統一的なシステムに束ねようとする衝動のようなものが芽生える。その衝動に従いながらさらに実践や鍛錬を深めていくことによって初めて、「メタシステム段階」が立ち現れる。

レクティカでの経験やこれまでの発達測定の実験上、メタシステム段階に到達している人の言語には、堅牢性から生まれる力強さのようなものがみなぎっていることに気づく。そして、この言語の力強さというものが、実は規制的機能の表れの一つであることに気づく。要するに、メタシステム段階の言語特性は、複数の領域を単純に束ねるような主張をするのではなく、束ねた統一的な理論を用いて、一つの力強い主張を生み出し、それは主張の要素となっている元々の複数領域が内在的に持ち合わせている限界や盲点に批判を加えるような内容を伴っているものなのだ。

先ほどの論文を読みながら、そのようなことをふと思った。論文を読み終えた後、出版記念セミナーの第二回のクラスを行った。昨日のクラスに引き続き、今日のクラスも私自身が多いに学ばされることが多かった。備忘録として箇条書きにしておくが、例えば、能力の成長を生態系のメタファーを用いて捉えるだけではなく、エネルギーの観点から考えるという点はとても面白い。

能力の成長において、「バランス」という名の「平均化」や「均質化」を実現させようとするのではなく、エネルギーを分散させるのでもなく、局所的なエネルギー投入というものがやはり必要になる時がある。クラスの中では、多様性の確保された生物種が生息する生態系のメタファーを用いて説明をしたが、今後はエネルギーの観点からも説明を試みたいと思う。というのも、ダイナミックシステム理

論を学ぶ過程で、必然的に情報理論に触れることになり、その中で情報をエネルギーのように捉える考え方にしばしば接してきたからである。

とりわけ、「エントロピー」や「ネグエントロピー」という概念は、情報エネルギーの状態を表す際に重要なものであり、発達現象の研究にそれらの概念が活用されていることもよく見かける。そうしたこともあり、エネルギーの視点というのは今後も温めていきたいものだ。

また、日本の伝統芸能における「守破離」という考え方は、キーガンの発達段階モデルで言えば、段階3から段階5の移行過程と似ているものがあり、守破離はもともとは能力の成長について適用されるものだったが、それは器の成熟の説明にも活用することができるのではないか、という面白い話題もあった。確かに、現在の私は西洋のアカデミアが産み出した発達理論を主に学んでいるが、実際には東洋、そして日本においても優れた発達理論というものが歴史的に存在しているのである。仏教の意識の発達モデルにせよ、例を挙げればきりがない。今後、私は少しずつ東洋的な、あるいは日本的な文化に根ざしている発達理論に関する探究も行っていくことになるだろう。2017/7/23
(日)

1338. 自己の主題を求めて

怒涛の流れ。昨日と今日は、自分の内側におびただしい量の洪水が途轍もない勢いで流れ込んでくるかのようにであった。それをもたらした要因の一つは、ゼミナールを通じて多くの方と触れ合ったことにあるかもしれない。夕方、窓の外から景色を眺めると、白い雲と薄黒い雲が混じり合うような空模様が広がっていた。そして、今も私はその空を眺めている。窓から見える景色の中を、一羽のカラスが左から右へと横切り、すぐさま、一羽のハトが右から左へと横切っていく。左右白黒。

午後からの仕事を終え、私は少しばかり休憩を取ることにし、休憩の友として、辻邦生先生の『モンマルトル日記』を読んでいた。これは、辻先生が二回目となるフランス滞在時代の日々が綴られた日記である。ここには1968年から1969年の一年間の日々が綴られている。辻先生の文章を読むと、時折、生の歓喜や情熱などが自然と自分の内側から滲み出てくることがある。今日もそうだった。

辻先生が若い頃、ドイツの文豪トーマス・マンの作品を熱心に読んでおり、中でもマンの私生活に触れられた日記を読むことに心をときめかせていたことがあった、という記述を見つけた。マンの日

記から多大な影響を受け、日々の探究生活について執筆している辻先生の日記に対して、今この瞬間の私が心を打たれているというこの事実には、私はただただ感動していた。

私は決して一人で生きているわけでも、一人で探究を進めているわけでも決してないのだという当たり前の事実。これをもう一度眼前に突きつけられたような思いになり、同時にそのことが私をひどく感動させた。徹底的に独りであり、完全なまでに独りではないということが、どれほど励ましを自分にもたらしてくれたかわからない。あともう少しで何かが見えてきそうな気がしている。

あともう少しで、徹底的な個に辿り着き、そこから全への解放が実現されるような気がしているのだ。この「もう少し」があとどれほどの時間と距離を持つものなのか、それはわからない。だがもうその尻尾が見えているのは疑いようのない事実である。そこに辿り着いた時、ようやく全てが始まる。逆に、そこに辿り着かないうちは、何も始まらない。

読んで書き、書いて読み、読むことと書くことの間にはその他の出来事がそつと挿入されるような生活。そうした生活は、今朝の早朝の静寂さよりも静かであり、今突然鳴り響いた雷のけたたましい音よりも激しい。

私はやはり、自分の主題というものをまだ明確にできていない気がする。徐々に主題の要素が見え始めているのだが、その部分が全体となった主題そのものがまだ掴めないでいる。それを掴まなければならない。欧州で送る日々は、主題の明確化にあり、それを驚掴みにするためにあるのだという確信を得ている。今はこの確信を頼りに、日々を可能な限り深く生きることが自分にできる唯一のことである。2017/7/23(日)

1339. 人工知能の探究と論文創作について

夕食後、就寝前に向けて、本日最後の仕事に取り掛かる。その前に、私は昨日自分の身体を包んだ、月の引力に導かれた満ち潮が依然として引いていかないような感覚について少しばかり思い出していた。昨日の夕方からそのような感覚がずっと自分の内側に残っていた。それは言葉の形として外側に出ようとしていることがわかっていたので、私はなんとか言葉を当てながら、それをあるべき形であるべき場所に生み出そうとしていた。

しかし、その試みは難航し、なかなか思うようにことが運ばなかった。見方によっては、それは言葉を当てる試みの失敗であるが、見方によっては、自分の内側に絶えず外側に出ようとする何か根源的なものがあるということの印でもあった。私はこの根源的なものを大切にしたい。それが自分の表現活動を支えるものであるし、それが自らを深めていくための養分なのだ。

望むのは、それが枯渇することなく永遠に沸き立つことである。この絶えず沸き立つものに全てを委ね、ただそれをあるべき形であるべき場所に生み出し続けることを試みていくこと。これが何よりも大切である。

人間の知性に関する探究を深めれば深めるほどに、ここ最近の私は、人間の知性が生み出した人工知能について関心を寄せている。人工知能の存在は、現代社会においてとりわけ重要なものであり、それは教育・政治・経済など幅広い領域に関わり、それらの領域を通じた社会実践に関わるものである。

昨日も、今の私が人工知能の探究に向かっているのは社会からの要請である、という考えが湧いていた。それと向き合わざるを得ない状況であり、それと向き合いたいという強い思いを含む状況。両者の状況の混合物が、人工知能への探究に私を駆り立てる。先日購入した人工知能に関する三冊の専門書は、この探究を始めるためのきっかけである。ここからさらに本格的に、私は人工知能の探究に乗り出していこう。人工知能の探究と関わり方は、コンピューターサイエンティストとしてのものではなく、知性発達科学者としてのものである。

これから一日を締めくくるための仕事して、ピーター・モレナーの二本の論文を読む。どちらも多変量時系列データ解析に関するものである。それらの論文の概要を読んでいると、私は自分の主題らしきものと同様本格的に向き合う時期に来ているように思った。「なぜ学術論文を書くのか?」「学術論文とは何か?」という問いとまだ完全に向き合いきれていない自分がいる。

というよりも、まだ一度もそれらの問いと向き合ったことがないと言ってもいいだろう。他の研究者の論文を読むことも必要なのだが、私は自分なりの意味付けをそれらの問いに対して行っていく試みに着手しなければならない。そして暫定的な意味付けを行い、そこから書くということに関する方法

論を確立し、原点に当たるそれらの問いと生涯にわたって向き合っていくことが必要だ。そうでなければ、方法論の進化もありえず、意味の深化も起こらない。

それらが起こらなければ、自分の内面の成熟も起こりえないだろう。とにかく、それらの問いへの現在の自分なりの回答と、そこから論文創作に関する方法論を自分の手で作り上げていかなければならない。今、私が望むのはそれだけしかない。2017/7/23(日)

1340. 意味への渴望と意味への意志

今日は五時半に起床した。起床直後の空は薄い雲に覆われていた。朝日が差し込むことはなく、どこか神妙とした一日の始まりだった。朝日が差し込む一日の始まりと朝日が差し込まない一日の始まりは、これほどまでに感覚的な差を自分にもたらすのだということを知る。起床直後、私は少しばかり戸惑いの感情にぶつかった。それは、これまでの日々と同様に、読みに読み、書くに書くという一日を送ることに対してだった。そのような形で今日という一日をこれから送るということに、一瞬ひるむような思いだった。

しかし、起床直後の日課である身体運動をしながら、ゆっくりと身体を目覚めさせていると、私にはそのような毎日の過ごし方しかできないことを知る。読みに読み、書きに書くという日が今日もまた始まったのだ。

一瞬のためらいと一瞬の疑い。それらは自らの生き方を再確認し、方向付けていくために不可欠なものなのかもしれない。だが、このためらいと疑いの念を木っ端微塵にする形で進んでいきたい。奇しくもそれは、昨夜の就寝前にも考えていたことであった。ためらいと疑いが生じる背景には、やはり今の私がまだ論文を書くことの理由と意味を明瞭なものにしていないからだろう。

読みに読み、書きに書くというのも、全ては論文の執筆につなげていくためのものである。確かに、読みに読み、書きに書くということの背後には、論文執筆以外にも、純粹にそれらの行為への没頭を大切にしているということがある。だが、自らの仕事で何かを考えた時、それらの行為の産物は、やはり論文なのだ。行為の産物としての論文の意味、そして論文を書くことの意味をより明瞭なものとしたい。

行為と産物との間には、まだ薄い霧のようなものがかかっている。その霧が晴れ渡るように尽力したい。そのためには、書きながら何かを見つけていくという意味と書きながら何かを掴んでいくという意味が不可欠となる。それしか方法はないだろう。

論文の意味を見出したければ、論文を書くのである。論文を書くことの意味を見出したければ、論文を書くのである。今の私はまだ、自分の内側にあるとめどなく沸き立つ熱情を持って論文を書くことができていない。それが今の私の最大の問題であり、最大の課題である。

小説家の辻邦生先生は、小説そのものの存在意義、そして小説を書くことの意味を生涯にわたって考え続けていた。辻先生が小説家として最初の作品を世に送り出したのは、三十代も終わりの頃だった。三十代の前半、辻先生はパリで四年間の時間を過ごした。その期間は、小説の存在意義と小説を書くことの意味を見出すためだけの時間だった。

絶えず考え、絶えず書くことを通じて、自分なりの確信めいた意味を掴み、それ以降も、掴んだ意味すらも絶えず脱構築していく過程を通じて、作品をこの世界に創出し続けた辻先生の姿には多大な共感と打たれるものがある。

辛抱の時期。耐えに耐え、耐えに耐える中で、自らの仕事の意味を掴もうとする時期。論文の存在意義と論文を書くことの意味を見出すことがいかに難しかろうが、その課題と真正面からぶつかりたい。向き合うのではなく、全存在をかけてぶつかりたいのだ。課題を乗り越えるのではなく、課題を打ち壊し、また新しい課題を自ら創造してくのだ。

何としても、何としても明瞭な意味を形作り、それを掴みたい。意味を形作ろうとしない者に、意味など見えはしない。意味を掴もうとしない者に、意味など掴みようがない。意味への渴望と意味への意思を絶えず持ちながら毎日を生きること。今の私にできるのは、本当にそれしかない。

この一度限りの人生において、今の私が欧州で日々を送っているのは、この課題と真正面からぶつかるためなのだ。何からどのように手をつけていいのかが一向に分からない状態が続くが、それでも今日もこの課題にぶつかっていく。そうした気概と気骨さに満ち溢れた一日にしたい。2017/7/24 (月)